



詠諧州庵集

詩



5
2239
2



利5
2299
2/27



純悌軒房集 春

明治四十五年五月十四日
富山房記念式寄贈



一日山寺よりわきめて満花四方に
ふりかへ

小枝

心とちりひーふりきき山とて

襟を小鳥もかけまゐる空 白空

凡呂交とるにやうするも案 一洞

うらさ豆腐に口をかえる 十丈

板より行燈ふり月影の影を

蒼く結た風もあましくん枝
ゆく水も川原さけのつらつきて
細ろや一場のやそけりふ洞
うつろいゆき物もあましくん枝
此経難持とよみ居つてはく空
うに味嚼に香山徽のまのつらと
うそふとぐせはうつひそめる夫
玳瑁の浪のかぶりぐ目り立くえ

又あましくまといふ山雀枝
海のまのくろみうえて月の晴
向屋ろ枯き酒く杯をぬ洞
とよみ深れあつてまのつらと
あましくさぬやうもあましくん枝
あましく居るやら役をさうり洞
川はあましくあましくの役夫
茶の杯ろあましくあましくの役

園庭の入り眼鏡体なる枝
よく中腰の袴と少く出でて
七日の早暮にうれしくいなり
弓張りしものまゝくわゆる石灯籠枝
中で肥ふが所乃麻をり
後うけくくさきおろく宿懐ひ
よい茶いふとさしめよと
梅がすきとあつりの用よと

ゆよりかよとあつたハせん枝
ひうくや嵐乃吹そしられ新
あうにほきてまゝたき
とさしめる椿の内とさしめ
ゆはえりあそび乃二月
あふくと甲あそび厚もあそび
くまをさしめり

あふくと甲あそび厚もあそび

是より先や花乃仕乃より僧侶毎

わうしあそと寝

散花や小松下草道くさり全

ごらくと佛くさばやあの下小春

寝そ居つてあゆむるそえん糸襦 是お

花えよ也

あまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

あまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

のうきもくくのうき新花えうか如中

らうたやあらうに花乃つらうあへ

らうたやあらうに花乃つらうあへ

あまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

あまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

花子用何故のうきくもあまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

あまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

あまの目にくさきし襦きりてさよとやの偶

やげくまーう江世の花よ雪解一 松山

能列吼本山を約

今いその花乃えこるじ 吼本山 全

言解大原用基の所之一本此様と

よつう拙しきしるにゆかきよけ

と悟りてさうらふあはるるようけ

名ありととて決身に解ききしと

いしに著流之大原の自作の像あり

日一所を約

うハ葎叶は糸とよりー や山 極 ぬき

下白の字は

神さのそとく 極やうの極 万子

日一所を約

を更うう 葉内 連一 山さうう 桐と

よわじし 石川 極さうよう 好ま

からりて

い花よ著て 二葉もとさうようー の所 葉を

けうし 聖のまのまの極の大本あり

回葉より一花咲けりと里人の極り

安宅のより江吉彦より引返してと
西へ竹松といふ里の傍より十丁を
回れ申す佐吉の社と云を雀鳴る
挿頭野の里といふもけありあり
多石神 社あり

七種 万歳 羽子板

友引

万歳や花伝せうみりも軽うけ 傘下
万歳や蘇くくへく 中へり 和 河子
万歳乃もくくくくくくくくくく 和文
板の羽子板く板の厚さず 伏文

かきりくくくくくくくくくく 蘇子水枝
二つ子にうくくくくくくくくく 袖月
炸のあらそ 拍子あきくくく 和山

鹿

うまは海に鳴く 浪戸乃浦 卯七
うまや何人 也れとあふ山 聖角

凡

花もよや谷のふもみ 露れあいな 浪化
 花もよ乃あまの 養をけり人 近き 物凡
 いらしとや 竹ととり 出せ道も 桐
 うらとや 竹と 敷くく 子孫 依文
 若鶯の 声小い ぐや 草乃まき 葎
 若鶯 やうく 中と 粘栗 守し 双
 黄古や 茶とみ 志保る 志此 ぬ 支房
 習書 爲乃 志く 志く 後や 志と 志 志
 習書 爲乃 志く 志く 後や 志と 志 志

梅所

梅乃 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く

小形とみ 志く

つくとや 梅乃 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く

梅の 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く

山科の 梅乃 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く

徳島の 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く

梅乃 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く 志く

い免く香や油なるは湯を正に温故
そや一物と梅乃自いや敷る言葉水
梅の香や少んもの香る枝折門一洞
毒喫て雀の毒や好ましく記白免

我信

わくかにをてなまきくも梅の梅
あふさぬまのあまひり梅乃益舎姓
大にらぬおしきぬ梅の巻く乳漁川

ありあけ

のさそれぬ益かくせい免乃ら記小枝

神法集

梅よりく家身なる塵俗竹の凡全

大神講月次

枝つえや梅のさうに念を入後者

か湯田井の邑天満文守納

毒さげえこまうりぬらぬ神魚湖

昔ある人草堂とてありけり

南之丸もみ谷もらるる柳小松も人

深物をたうらむて掛籠折れ後健

青柳や中も一筋 塚乃酒は 呂谷

口上乃とて 詠歌や記の家 小枝

ふる舟りもみさる柳乃泉乃 移信

新寒 猫乃書恋

蝶ハまゝの日ありと世にさむとた 二川

京のくまにゆく志賀博士まよ

あゝの寒さの糸綿こころもやうる此花 定凡

かゝゆる人まじとれく梅乃意 桐之

よのゝ名も忘るやとらん梅の意 佩竹

明葉の 善北田 田中 子のとれ

毎代や身代とてくる 五子 松東

まゝにわらひのちりてくはけし 好凡

ありてはし

もろもろや撥もたまら 他つと 言是 知則

やふりやふんを掛する 新橋料 後者

やふりやまへはけして 竿の籠 松山

十うあふもあふまうせう 波岸 細中 志風

社活の芽に幅短く 由勢 波岸 三ヤコ 梅本

乞食の頼らふて居るいん 札 三ヤコ 信之

帰鴈 燕 雲雀

能別 あま

麻酔のや 厚を 破る 胸 乞 京 白鳥

そくさか 一急や 掃つて 朽る 厂 枝 束

鳥の内を 築き ちりて 居る 燕 小 十丈

止々不須説我法妙難思惟

つえりて ちりて ちりて ちりて 法 花 小 白鳥

さく ちりて ちりて ちりて ちりて 雀 小 一琴

余のちやらうあまのこころをうけし 志風
あふねをうけて下りあはれを雀か 林俊
二とあまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

かきつねのこころ

小雀のこころをうけてあはれをうけし 菅原
あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

雛子

あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原
あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

旅行

雛の子やあまのこころをうけてあはれをうけし 菅原
あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原
あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原
あまのこころをうけてあはれをうけし 菅原

山中八景
上原野雛

草の葉もさげさやしくさの声 三枝

魚店

くらましくれもりぬ 雉の如まうか 南浦

桃の花 ひかわきい
しん

山中八家

下谷桃花 二言

下谷や鹿乃史 桃もくれかど

牛羹と一目わきよ もくわい 自笑一

ふかの乃へ 暢みわさ もくわい 男うれ 後者

細工のより もくわい 浪人の舟へ

ゆいさねろ もくわい わら もくわい 離作 もくわい 全

五

もりあつ もくわい 只 もくわい 離のち もくわい 刀 作

離 もくわい け もくわい 今 もくわい の もくわい り もくわい ぬ もくわい 塩 もくわい 子 もくわい 玉 もくわい 芥 もくわい

樹

江尻田や種子とあり青乃西桃輝

山家よまをさうて

源流やうらけりて先ておく種自笑一

田の香や種花ふ思りりら少校一

目乃入と唱そ居あきと種うれ形角

標もあゆく遠まゝる。怪うふ朱松

あや居

美子あう進まきくまのたけり種初之

藤 藤

二とあ

ねをゆりて道とわのほく管自川 市中

花のこき盛うう新つー川 三ヤユレ 農河

銀江危丁入居 松う那 邑安

行水よあうつ種ふ橋ふ瓶竹

藤 山家

定法よりあるは世

山吹や巨挿く物としひるまは十丈

山吹のさきけあまふ不動徳とうや
いふふあしあそあそあそあそあそ
筆あしあそあそあそあそあそあそ
いふふあしあそあそあそあそあそ

藤あそ八を山吹とかりあそ

あそあそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそあそ

呂谷

石法ト

ル下

卯辰山金剛 密寺 瑜伽最上系

乃靈場あしあそあそあそあそあそ

地之本地在不動四王よりあそあそ

院北山の山法あそあそあそあそあそ

陰とあそあそあそあそあそあそあそ

さうり

あそあそあそあそあそあそあそあそ

雑春 言書

かき汁を引よるききかきよるく小

友

郭公

新やまのやまの茶屋にほくさる舎屋

のりやう系

村角村んかーやうにきき乃舞系激士

小園不備つてい

郭公畜体とせよ 黒 津 舟 西秀

くわいあひい小侯神徳

育園乃あんどいもふー子記 牧童

杜宇小侯がいふうさんなり 志風

猿行

るかしをんやうや 蜀 魂 柳之

げきあまのまじけや 峯の畑 色密

一本の杉松らうや 霍公小枝

あてとあに田よのこさる家杜鶴 万子

あいつらひーくも一羽も 馬車帝 智月

その中れ年了もいよきふ少ゆし列

春とちよきん松のゆきまをくらの
ふいあがりまをりあともみあまを
くれま結こまにうこらまを

時をり花よあられやかさうらその一何

ふ年の川あまはみま長とて

川あまうき世隣のわとくも日矣



川のらら谷橋は旅家の地へくまはあまの
平あまあたりてもとくちたさる所
のたのひまあまありと一やうさ道し
と自笑うかりまにありしとせりま

今のもいあまこくま心あまらる 白雲

吼木山を約

ふとあま権佛のこる 昌皖全

菴のく色

あつていれ免つーや子規全

こころあま

人中へそりり申すに 拾う 仏 園友
衣久 善くさき 袴のさりりか 唐履
らんありと 袴さく ころも 拾ふ 後書

御衣系 定戸さしる

あからまし 拾出するや 文とく先 撤士

灌佛 花つみ きのり

里人や 布より 妙のく 仏とく云 水巻

花つみや 見牙おろく ともかへー 巴き

あのおい 墓まのりのものかへー

卯月 八日 越中 越後 越前 越中 越前 越中 越前
此の天平年中 行基菩薩草 剣
聖武帝乃 勅 就 不之 本 尊 教 自在 尊
於 物 利 天 安 居 之 際 一 華 一 香 一 刀 一 礼 之
尊 像 之 ことり 号 安 居 寺

罪科のをもとつみするなる花が 白空
坊主子れあくくいをもとるあが 小若

田家系

軌くく尾とあへり根を益 字法

茶店よりを御く

百おいて私の見くく海つりか 張書

牡丹 ついでに

浪家の後り所外や白牡丹 一人

田家

よりくく里の屋敷や 杜より 一詞

ありほみことつそや 松くくく 松の 小河

温泉まで

山中や水湯のほととれく あま

かきく 少松 と 芥子も一まや衣く 夕市

豈ぬいの背戸うら 後者

卯の花 新樹

卯の花やこのあは 十丈

うのたや紙とく里乃乾気と 船政

神法集

歌達しいと道一伊勢の庵り下 詠言

柴山のこを被く 庵る墨より下 池光 石部

谷内く乃心あつらひ庵り下 芦葉

実儀や古茅とよまの修短 邑寄

歌下ふを納

実儀のまことあつらひ源一乃 呂谷

歌下ふを納

筆かりくまをうのえん 昔祿のね ねと

恒泉よ侍るころ 祿祥よあきて
桃青の筆れ後もすのうーく

その桃乃味むすれこのあまふ 家三

諫鼓を 藤子

お前のうた

ふとまよこい又しねと
そのうたをいふと

うた我とさういふやかんこゝろ 翁

けりわきこの集よん侍道と自筆
まてうくおすろまことん侍しかり

ふさや二交ものうやて かんこゝろり 李東

吼木山を納

志うの子ろこゝろもがしむふ路が 南浦

藤子とらふ題はさうて

あう乳むや 藤子 鳴 藤子 全羅

角のゆゑ 藤子 けいこゝろ 福 百花

青麦

何より眺る

青麦あ志ほくく思はる 流 詠 六

とまこと 流 涼し 流 麦乃目うり 流 改之

うら久にあわし 流 凡や麦のう 流 秋 流 秋

村あや 流 麦うる 流 比の 流 梅 流 ち 流 や 三人 一笑

麦林や 流 道の 流 わ 流 さい 流 牛 流 の 流 尻 流 呂 流 谷

麦林や 流 念 流 中 流 名 流 の 流 つ 流 き 流 け 流 自 流 笑

皋月 田植

蕉翁の墓かまひりて

この笑やうらみさつきの墓はあ
初もついでにまをまげーみ月る金銭
茶本の白ひとさ月 凡か申
海のもをわさり立て回る十丈
百姓のうらみとさうぬ 田植ト 孫貝
骨のうらみとさうぬ 田植ト 孫貝

昼ふみ泥と糸かくる 田うへト 桃群
ひとらうらみ乳さのうらむ 田植ト の倡

さる無実の海しる牙丸 加久味神社

見よーふき田のうらむ 赤呉の海 潤白

田井とさうらとさ

吾睡也やふ田乃やのみさうり 白足

稲年 稗

子麦の稲年へうらむ 乱れ 治化

父の二月廿日に身まかりて

わかれゆく日ハ一代れなむと一編

むとむに念入る 糶う那三枝

そのまらつのとせり麦 糶の徹

徳島福山

鳥 鷓 鴨

三月後

家待郷の四代を

布勢のまへへあはれなる小鷓 海人

氷見

城山のちささくさへさしつる全

奥越堂や卯月のとまよる鳥全

塔りとりささりの鳥

鷓やあはれささくさしつる

色素

らくく月れつる浦の穂

まふの鳥のまは羽織るて小

ささく海鳥のささくさ

螢 五月の月

る洗ふ蜀漆のまじりの螢の光
くまのしほきな流すわづら 昔の

山中八景

桂清水螢

旅人と跡も出さくほるる家 桃輝

うら表紙移しみ乾わするうら 乙良

をいんくくちい家さうりうはいんと
後とありー十日有る月のいんく

ほのくまに川のかくれ跡くいんく
あまのたのみいあるかきよつとみん
なまこといりていれくうほるるのい
る跡くいんく

これわする我をけしき回しり 昔の
柳うら古明りまや 花やうら 魚素
い宿まきくせうかある 螢うら 木ん
中二階 糸わするるいんく 五月の月 素之

散

唐室めて

志もくはて敷のふとまはこころ布人
貴方の敷をこけや角大師拙譯
ふふふふふふふの敷をふ一頁
吾指伝志まふては乃板海市市
行素とふと人やりて敷をふ 林伝
故怪つりてあら涼しやま 裸か申

五川 粉

川粉や粉あつきする宿にあま 朋水
振ふて粉よまふや粉乃 無 抄伝
次とけしと何と粉は麻子養の目 呂谷
ふふふて廣敷とのりる粉近一之

白兩 登堂一
蝶

夕立の帯つとふね 蝶乃後 長流
夕立や帯つとふね 蝶乃後 長流
夕立や帯つとふね 蝶乃後 長流

雲の峰にくりぬきしはるる色より一扇

る塚や夕立ふるるまよいらり 桃祥
白あや小あゝ前乃る地水 甲 聖角
於小立や咳くく死正桶の如 桐
る富海や松の生也一也の孝 桃祥
うらりくさくさのさくや雲の家 八子
ぶらりと標よきまゝくまはる たち
あしうへな露のあまやらの家 是桐

雲の峰にくりぬきしはるる色より一扇

孫行

標ゆてこま候あまゝ 孫衣 方山
其の言は是れあまゝ 孫衣 梅子

納涼

清水 水室

つゝ知をわきわたるてんてん 磯流 水 初海

田鳥れをわつく 壺乃あゆさうれ 枝東
 先風とや先てこめくすくふ 桃蜂
海ナニカ
 川形りよ所毎も物もて 涼ミナ 始有
 涼さうてうさうさうららあつさか 和鳴
 不白也 涼一鳥くさせりーら 加申
 唯方子 涼人ささ青のあゆさか 柳之
 詩人もさかあゆまらや 門もさみ 秋中作 秋有
 纏頭の後とさよとれや 夕涼ミ 志風

ころもさるぬ 坊ささきーくの涼ミカ 唐房
 涼むとてさうけあふあふ 音な夜うか 秋の坊一

能登のくまのいづみの入に虫ははるる系
 をるにりて秋日はあきく夕陽も霞
 あうし 神よりあて一さうまを救せ乃
 薩摩公あきと人あまれりし
 家志うさうさあ悲と發る

涼凡よ虫陣のまれ音な夜うか

南南村

雑考

五斗もろ織新柳のうめけた 怪物一

山中の桃梅子いんやとけ柳のけりや
桃の二字はゆりりいんやいんや
これんをききしんやいんや

ちあめんや 列々 貴目と 母や 風全

んーんー加列ま入て

白ふのきい ちんまきく 桜 へ麻 ろつ

な 藤やいふううもる牛のき ころい

川水のしうかく行やさうう 麻 烏水

浦の突や何そよあふ物の日 辰若

何骨乃んたよそけつく 舟 舟

藤のたやあたついつまきり 蔭房

そ 雛をそたよけりくも 深ふ 福活 温故

かこえけのたの重や 蟻 乃た 水此

チうかやかぎくもあくむ小まらり 秋の坊

明れーいんや

どうもあの突のりもあまきし旅やつれ 五人

中野山子のほろがりかの歌いあつ海の高原
せーまのーヤーとかが入らまて

我々のや新やまう海れ巻目全

伊勢道中

餅の鬼の蚊とのむ終廉が 句え

か列に沼那那谷親者中

身や和してしー這むおのふ方ふ

しおんた山は名海歌れの地へと云
つる作り形智と谷汲あまて

形若とふと

述懐

身やうして子又印の尻がーら海海

ホウアリ
新うのありおけまの海原
うのを控めてそとこころうれ

何とよとのせー池の輪ひーろ指具

ふ家

首がーしてさふらうらまの角まが 柳之

あまのうまきしはなふらふ瓜作り 全

虫やーやついでよき乃移りなり全

神々のうき

山凡や鋪之のときおほのうへ物事

紀列

紫のるや扇のしりて和知の浦海

ららあ

秋のさし海やこころを月の夜全

あーい

あせふをよまらりて後う那 秋夜

川下いる半 後ふ四後うれ 雨

ぞのうらと西瓜をかへん四後川 呂谷

